



サーキットステージでは、予選時ベストタイムをマークしてトップに立った西尾雄次郎。大差に甘んじることなく気合十分でロードステージに出発したが、奴田原に暴走を受け、加えて自らコースオフするミスで逆転を許した。ゴール後、ルールを明確にする他士の抗議が繰り返り上り遅れたが、不満な結果だった。



全日本ラリー選手権4輪駆動部門 [第4戦]

ACK SPRING RALLY

■4月22~23日 / 熊本300km

Photo: Hiroshi Sakamoto (坂本真志) Report: Yutaka Murai (村井 豊)

驚異の追い上げを見せた 奴田原vs西尾の対決は 予想外の結末に……

昨シーズンのフラッシュバックを見るような奴田原文雄の猛烈な追い上げ。サーキットで失った秒をグラベルハイアベで取り返して行く。まさに、昨シーズン見せた強さの再現劇だった。自ら逆転不可能とさえ語っていた、リーダー西尾雄次郎との大差を中盤で逆転、歓喜のフィニッシュを飾った。だが、その先に待っていたのは非情の宣告だった。



より強くなっていくだけに不満、選手にも伝わる。



此文で首位転落したとはいえず、アベハイアベで見せた強さは今季も本物を感じさせた。100%に集中した。



「アードで吸めずまる勢が出ないよう」とスタートしたが、この結果は自信につながる。

「アードで吸めずまる勢が出ないよう」とスタートしたが、この結果は自信につながる。



大会直前まで専用エンジンを壊し急ぎノーマルエンジンに換装した石田だったが「予選外の頃はラッキー」と3位。

石田らダンロップ系のランサーユーザーが装備したフォーミュラR・D81は、265/40Z R130のピッチサイズだった。



どうした？ 藤部さん、というファンの声が聞こえそう。膝々に倒れて不本意な4位。次戦もまだしかなかった。



寂しい。今度も参加台数は伸びなかった。

得意のサーキットステイジで西尾が14秒のアドバンテージ

全日本ラリー選手権4輪駆動部門は、早くもシリーズの半ばにさしかかり第4戦、ACKSプリンクラーリ、が九州・大分県で開催された。ACKSは二二数年、序盤がオートポリスでのサーキットステイジ、中盤から後半にかけてが周辺林道でのハイアペレリョラリー区間を中心とするロードステイジに区分けされている。今季もスタート会場は、オートポリスサーキット、サーキットステイジでは、本コース、ミニサーキット、外周路を使い7.5Sが行われ、ロードステイジでは3ステイジにも区間のハイアペが用意されていた。このラリーの特徴は、「サーキットでいくらか差を広げても、たかが知れてる。後半のガレ場のハイアペが勝負」と、同年の覇者西尾が語るように後半のハイアペ、それも人頭犬の石が点在するガレ場林道をいかに克服するかが、勝負を握った西尾も昨年、サーキットステイジでのリードを後半に吹き出し直田原文雄に逆転を許している。オートポリスサーキットに集結したのは、レギュラーを中心に26クルー、レギュラー陣はC-ONEスポーツや大塚誠介ら以外、ほぼ全チームが参加しており勝負自体は白熱化するものと予想された。また、前号で報じたようにキャロッセスポーツのラリー部隊・監督として桜井幸彦がラリー会場に戻ったのも話題を集めた。「大嶋（治夫）も相澤（正志）もかなりマジになって練習していますよ。今回は、ランサーコアースだから、インプレッサの我々は不利だけれど、次（ひえつき）から期待できると思う」と桜井監督、彼のゲキで強豪キャロッセが復活すれば、トップ争いがより面白くなるだろう。こうしてスタート時刻を迎えた26台の競技車は、パドックのすぐ横にあるレイクサイドコースへ向かった。テクニカルなジムカーナコースとハイスピードセクションで構成される約1.6km、ベストタイムの平均速度は81km/hほどのコースだ。ここで西尾が71秒のベストタイム

ACK SPRING RALLY

願っていた6年間、やっと陣治光久に栄光のときが来た。ゴール後は真正な顔をくしゃくしゃにして喜んだ。



3位からトップ2がリタイア。優勝が見えたが弊団自らのミスで薄氷を踏む勝利となった。



見えなかった勝利がラスト前突然やってきたが中尾無念の2秒差2位。



中盤のハイアベでタイムを削っていたら勝利もあった小田切真は3位。

TOPICS

桜井幸彦監督で復帰!



久々登場で気を吐いた和本誠。



鎌田親子はそろってリタイアに終わる。



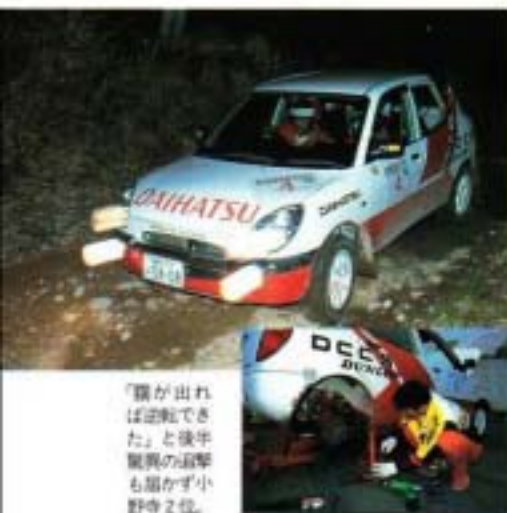
ドライバーを激励して、追い込める監督に变身。

キャロッセのサービステントにあの男が帰ってきた。桜井幸彦だ。キャロッセスポーツラリー部隊の監督として戻ってきたのだ。ドライバーとしてでないのは残念。桜井監督誕生で、俄然本気になったのがドライバー連で、かなりシビアなゲキが飛んでいるらしい。強かったキャロッセが復活すれば、さらに面白いトップ争いの期待できそうだ。

動揺のためかSS5では西尾のベストに15秒も遅れ、SS6でもスピン。SS7は1秒差に抑えたものの、西尾に26秒もの大差をつけられた。サーキットステージを終えて、序盤僅差でトップの西尾はブチギリリーダーに変わっていた。続いたのは14秒差の松本。過去、サーキットだけでこれだけの大差がついたことはない。だが、「山(ロードステージ)は何が起きるかかわからないからね。いつもより差があつて気分的に楽だ、という程度ですよ。それに私も心配」と西尾はあくまで慎重だ。逆に、2番手以降は激戦となった。2位松本に1秒差で、「西尾が速すぎたね。サーキットのメインコースはどうも苦手だ」という後部、3秒開いて4位の大嶋、菅野正之、橋田範厚が1秒ずつの差で5、6番手。さらに奴田原が6秒差、3秒差で柳澤、1秒差で直前にエンジン壊しノーマルエンジンで苦戦する石田正史、「サーキットはほとんど経験がない」と話す鎌田卓麻らがベスト10を構成した。この混戦のため遅れた奴田原も息を吹き返し、「2位とは12秒差だから十分に逆転圏内ですね。一時はどうなるかと思つたけど、この状況で70点取れば最高でしょう。何とか逆転します」と気合を入れ直したほど、この気持の切り替えが、信じられない展開を生むのだ。

山で西尾がコースオフ 奴田原怒濤の追い上げで逆転

ロードステージは、前記のようにガレ場との勝負、エンジン特性を考慮すると、「石を避けるのにアクセスを緩めるでしょ。再度オンしたときのピクアップはランサーのほうがいい。ランサーコースなんです」とと後部がいうようにインプレッサの西尾としては、この点に不安材料がある。1ステージでは、これが現実のものになってしまった。奴田原が驚異的な追い上げを見せ始めた。第1ハイアベの3CPでいきなり4秒詰め、続く5CPでは2秒、7CPで5秒と見る見るうちに差が削られて16秒差まで急接近したのだ。当然順位も気がつけばコメントとおりの2番手まで浮上して



「羅が出れば逆転できた」と後半展開の展開も届かず小野寺2位。



「危なかったですね。途中で川に落ちそうになるし、小野寺くんには追い上げられるし」2戦連続優勝を飾った島田もダートで習い済み決して楽な優勝ではなかった。



江上賢治は栗津原リタイヤ後、ダイハツワークス勢に対してコンスタントなペースで走り続けた。トラブルもあったが貴重な3位50点獲得。



左フロントサスが壊がってしまい、その後走行を続けたためタイヤは剥けてしまった。



「アンダーはいなと思ったらガッツンとすごい衝撃が来た」栗津原はSS2で仕切ったクラッシュ。左フロントサスを大破してリタイヤ。

いた。サーキット上位の松本は、「ウェットタイヤを選んだ。完全に裏目や」と8位まで落ち、綾部は、「コースオフだよ。それからアライメントが狂ってしまいまともにも動かなかった」と5位に後退している。この時点のオーダーは西尾をトップに坂田原、6秒差で勝田、1秒差に石田、2秒差に綾部、1秒差に大嶋、6秒差に柳澤の順で相変わらずの混戦模様。望むべき最良の結果である2位を得たばかりか、残る5ハイアベで逆転の可能性も見えてきた坂田原。速達とも思える強さを得た昨季の活躍がオーバードライブしたところ、またも勝利の女神が坂田原にはほほ笑む。猛追をこらえていた西尾が、あろうことがコースオフを犯してしまった。

「アンダーでゴンツですよ。エンジンが止まってセルモーターが回らずに、バックシタながらクラッチをつないでやっとエンジンがかかった。そのあとオーバードライブしてしまっ」と悔やむ西尾だが、ここでの23秒遅れは余りにも大きかった。坂田原が2秒遅れで走りきっていたからだ。大逆転。サーキット終了時には誰も予想できなかった展開。これで、坂田原は5秒西尾をリードした。さらに西尾に不満が重なる。2ステに残る2ハイアベがキャンセルとなってしまうのだ。サービスに戻った西尾は、「アカンね。あんなミスをするようじゃ。逆転されて、まじっ巻き返すぞ」と気合を入れ直したらキャンセルでしょ。まじっ展開です」と自嘲気味に振り返ったが、すぐに、「でも、このまま勝たせると、アイツを去年みたいに調子に乗せてしまうことになる。いくら何でもマズい。何とか再逆転しますよ」と話し調志に火がついた様子だ。逆に坂田原陣営は満面の笑顔で、「まさか逆転できるとはね。まだ去年のツキが残ってるんだね」と小田切がいえば、坂田原も、「ラッキーの一言ですね。2位は絶対に取るつもりだったけど、西尾さんのトラブルにつきますね。足もダートではいい状態だし、タイヤも

いいから、走りければ大丈夫でしょう」と余裕すらうかがわれた。この坂田原の余裕が3ステージでも快足を披露させたのか。唯ひとり美次元の減点を並べ、必死に追いすがり西尾を引き離した。結局、差は15秒まで広がり、坂田原が前戦に続き2連勝を飾った。かに見えたのだが、ゴール後、前記の事件により大いごでん返しが待っていた。抗議を審査委員会が審議した結果、SS5のスタートに6分遅れた減点をSSタイムに加算。坂田原は最下位に転落。西尾が繰り上がり優勝となったのだ。

A栗津原&日鎌田の相次ぐリタイヤで大混戦

一方、A、Bクラスだが、5台の参加があったAクラスは、いきなり栗津原豊の仕切ったクラッシュで幕を開けた。SS2のラスト2コーナードアンダーを出した栗津原アルトは、20cmほどの高さの縁石にホイールをヒット。その衝撃でストラットがもげてしまったのだ。栗津原がリタイヤすればストリア向士の戦いとなる。サーキットステージは、舗装巧者の島田雅道に平塚忠博がぐらいつき1秒差で島田がリーダー。今回は絶対完走。これ以上リタイヤしたら洒落になりません。

と小野寺清之は平塚に18秒差で続いた。だが、1ステで平塚がエンジントラブルを理由にリタイヤしてしまっ。その1ステでは小野寺が得意な裏路で島田を急追していた。25秒あった差は1ステで8秒まで短縮されていた。だが、島田も2戦連続優勝をかけてスパート。再度差を広げ、終盤はやや抑えたペースで逃げ切り、6秒差で優勝を飾った。

Bクラスは、サーキットで鎌田豊に廣川慎一が同秒で並ぶ健闘が光った。だが、ロードステージでます鎌田がコースオフリタイヤ。さらに、トップを守っていた廣川もマシントラブルでリタイヤしてしまったのだ。両者の後ろにつけていたのは、今季好調の瀧池光久だ。瀧池は、終盤に中泉晃に並ばれたが、最終ハイアベで2秒先行。苦しみながら全日本戦初優勝を飾った。